真(チェンジ！！)ＩＳ《インフィニット・ストラトス》ゲッターロボ！

ジンオウガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真（チェンジ！！）ＩＳ（インフィニット・ストラトス）ゲッターロボ！

【Ｎコード】

Ｎ８３７３Ｘ

【作者名】

ジンオウガ

【あらすじ】

ＩＳの登場に男尊女卑から女尊男卑へと変わりつつある世の中、そんな世界にあるエネルギーにより男でも動かせる機体が現れ、その機体を持つ一人の竜の戦士の血を受け継いだ少年がＩＳ学園に現れた……。

プロローグ？（前書き）

二作目のインフィニット・ストラトスです。見てくれるとありがたいです。

プロローグ？

ＩＳ。正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定として作られたマルチフォーム・スーツである。しかし一時期は兵器として変わり、そして今現在はスポーツに落ち着いた所謂、飛行パワードスーツだ。だがこのＩＳにはある致命的な欠陥があった。それは女しか使えないと言う欠陥であった。そのせいで世界は男尊女卑から女尊男卑へと変わっていた。

ＩＳが出回ってから約６年の日本のとある山道に一台のトラックが通っていた。

《……その後の運送に問題ないか？》

《はい。今のところ問題は見当たりません》

《よし。ならそのまま警備及び護衛を続けろ。万が一この事がアメリカやイギリス……》

ブッツン。

ハンドルを握っていた赤いマフラーを首に巻いた二十歳ぐらいの男が通信を切りながら愚痴る。

？？？

「ったく、一体なんだっていうんだよこのバカ騒ぎわよ……」

？？？

「そうボヤくなや竜馬。今運んでいる機体が世界に知れ渡る訳にはいかないから今唯一開発できた“ゲッター”を扱える俺達が収集さ

れたんだ我慢しようぜ？」

竜馬
「でもよ武蔵。いくらコイツの為だからってわざわざ俺達“ゲッターチーム”を呼ぶ必要あるか？いくらなんでもおかしくねぇか？つうか結婚式上げたばっかの俺まで呼ぶなっていうんだ！」

ハンドルを握っていた男、『流竜馬』はそうキレたような声を上げながら助手席に座っていた男、『武蔵』の言う事にそう言った。

武蔵
「まぁまぁ、そうカリカリすんな。ところで、あれから真耶ちゃんは元気にしているか？」

竜馬
「ああ、今頃は竜牙のお守りしているぜ。今年で3歳になったばかりだがな。今度遊びに来いよ」

武蔵
「ああ、そうさせてもらうぜ。しっかしあれだな」

竜馬
「ん？なんだよ？」

竜馬は首を傾げながら聞いた。

武蔵
「あの女に無縁そうにしていたお前がまさかの結婚とはな。あの時は俺と隼人も驚いたぜ」

竜馬
「無縁ってなんだよ無縁って！これでも好きな女ぐらいいたんだからな！」
竜馬は顔を真っ赤にしながら武蔵に怒鳴った。

武蔵
「ハハハハッ！すまんすまん！」

竜馬
「ったく！馬鹿にしやがって……ん？」
すると竜馬は、森の方に一瞬だけ何かが動いたのに気づく。

武蔵
「どうした竜馬？」

竜馬
「……武蔵。どうやらコイツの事をいち早く気づいた奴がいるみてぇだぜ」

武蔵
「……なるほど、“アイツ”……か？」

竜馬
「多分な。大方ジジィの作った“コイツ”が気に入らなくて壊す気だろうよ。何時でも動けるようにしとけ」

武蔵
「分かった」

そう言って竜馬と武蔵は懐から竜馬は赤いペンダントを、武蔵が黄色のペンダントを取り出しそれぞれの首にかけ始めた。果たして、彼らの言っている“アイツ”とは？そして、竜馬と武蔵は何を運んでいるのか？その答えは次回に……。

プロローグ？（後書き）

次回、プロローグ？。お楽しみに！

プロローグ？（前書き）

プロローグ？です。原作開始はまだですが、それでも見てくれるとありがたいです。ではどうぞ！

プロローグ？

～日本の雷岳にある古ぼけた別荘～

あの後、無事に雷岳にある別荘に着いた二人はそこにいた護衛の軍人数名と特殊なエネルギー『ゲッター線』を使用した男でも操縦することが可能な量産型試作ロボ『プロトゲッター？』数機と『ステルスボンバー？』と『ステルバー？改』を纏った軍人と一緒にトラックに積んでいたある機体を別の輸送車に運んでいた。もちろん、周りを警戒しながら。

？？？

「久しぶりだな竜馬。最後に会ったのはお前と真耶が結婚式を上げた時だったな」

竜馬

「テメェこそ久しぶりだな隼人」

竜馬はその場にいた同じゲッターチームの『神隼人』と話していた。

竜馬

「ところで隼人。あの積み荷の中身は俺達のゲッターの次世代機だよな？」

隼人

「ああ、現在ある初期ゲッターロボをベースに新しく開発された新型のゲッター炉心とプラズマ炉心の２つを搭載し、それをＩＳにした奴だ。なんでも、早乙女博士からのお前の子供への誕生日プレゼントらしいぞ」

竜馬
「そうかい……って！あのジジィ、俺の息子になんつうもんプレゼントしようとしているんだよ！？」

隼人の言葉に竜馬は頭を抱え込んだ。

武蔵
「二人共、機体の積み込み作業終わったぞ」

隼人
「そうか、ならさっそく輸送するとするか。竜馬、運転は任せた」

竜馬
「へいへい、分かってーーー」

ビィーーッ！ビィーーッ！ビィーーッ！

竜馬&隼人&武蔵
「「「！？」」」

突然の警報に三人は驚いた。

竜馬
「っち！さっそく仕掛けてきやがったな！」

隼人
「竜馬！武蔵！どうやら“アイツ”は俺達の運んでいる新型ゲッターの事を破壊する為に無人機を大量の送って来たみたいだ！今プロトゲッター部隊とステルスボンバー？、ステルバー？改が対処して

いるみたいだが、少し押されているらしい！」

武蔵
「クソッ！そんなに早乙女博士の発明が気に入らないのかよ“アイツ”は！？」

竜馬
「愚痴を言っている場合じゃねぇ！いくぜ！隼人！武蔵！」

隼人＆武蔵
「「おぅ！」」

竜馬
「チェェェェェンジ！！ゲッタァァァァァ１！！」

隼人
「チェンジ！！ゲッター２！！」

武蔵
「チェンジ！！ゲッター３！！」

竜馬達がそう言った瞬間、緑色の粒子が三人を包み込み、粒子が晴れるとそこには、竜馬が赤と白のロボットでプロトゲッターの正式機体『ゲッター１』、隼人が白の中心としたカラーのに左手がドリルのゲッターロボ『ゲッター２』、武蔵が黄色のカラーにキャタピラーのゲッターロボ『ゲッター３』を身に着けていた。これこそ、ゲッター線を発掘し、そのエネルギーを使用したＩＳに継ぐ最強のロボット『初代ゲッターロボ』である。

プロローグ？（後書き）

次回、プロローグ？。お楽しみに！

プロローグ？（前書き）

プロローグ？です。本格的にゲッターロボが戦います！では、どうぞ！

プロローグ？

竜馬達がゲッターロボを身に着けていたその頃、輸送車を守っているプロトゲッター部隊とステルスボンバー？、ステルバー？改は無人で動いているアメリカ製のロボット『リトルボーイ』と戦っていた。

？？？

「ったく！次から次へと湧いて来やがる！」

プロトゲッター部隊の隊長であり、竜馬達と同じゲッターチームの一人『車弁慶』は愚痴りながら自身の機体『プロトゲッター？改』を纏い、接近してきたリトルボーイを殴り飛ばしていた。

？？？

「まったくだ！！一体何が気にくわねぇんだよ！？あの脳みそ腐れが！！」

近くにいた、『ステルバー？改』を纏っていた隼人の部下『シュバルツ・カルト』は、手に持っていたマシンガンを撃ちながら弁慶の言っている事に同意していた。

？？？

「しかし、一体何処からあのリトルボーイを用意したんだ！いくらアメリカで出回っているからとはいえ、この数は馬鹿にならんぞ！？」

さらに近くにいた『ステルスボンバー？』の操縦者『マイケル・ヘルライト』は持っていたリトルボーイの頭を握り潰し、両肩のガト

リング砲を撃ちながら疑問に思っていた。

弁慶
「行かせるか！！先輩直伝！大雪山おろし！！」

弁慶はさらに接近してきたリトルボーイを掴み、『大雪山おろし』で投げ飛ばし、追撃でゲッターミサイルを放ち破壊する。

シュバルツ
「喰らえ！！ジャックポット！！」

シュバルツも、空から来るリトルボーイをマシンガンとバルカン砲を用いて次々と落としていく。

マイケル
「落ちろーーー！！」

マイケルはガトリング砲と両足のミサイルポット、胸に搭載されているマイクロミサイルの一斉掃射し、片っ端からリトルボーイを破壊していく。他のプロトゲッター？部隊もマシンガン、アサルトライフル、ゲッターミサイルやゲッタービームなどで輸送車に近ずくリトルボーイを落としていくが、あまりにも数が多く苦戦していた。

弁慶
「クソッ！このままじゃ……」

弁慶がそう言った瞬間、一機のリトルボーイが弁慶を抜き輸送車に近ずき、持っていたライフルを打とうと構えた。

弁慶

「ッ！？しまっ……！」

そして、リトルボーイが引き金を引こうとしたその時！

？？？

「ゲッタァァァァ！ビィィィィィム！！」

ズッキュュュュュンッ！！！

突然放たれたゲッタービームにより引き金を引こうとしたリトルボーイは融解し、爆発した。

弁慶

「今のゲッタービームは……まさか！？」

竜馬

「待たせたな！弁慶！」

弁慶

「ふっ！遅いんだよ！竜馬！」

現れたのはゲッター1を纏った竜馬と後から来た隼人達であった。

隼人

「遅れてすまない！」

武蔵

「だが、俺達が来たからにはもう安心だ！！」

竜馬

「いくぜ木偶の坊！片っ端からぶっ壊してやるぜ！！」

そう言って竜馬は上空のリトルボーイに向かって突っ込み始めた。

竜馬

「喰らえ！！ゲッタァァァァトマホォォォォク！ブゥゥゥゥゥメラン！！」

まず始めに、肩からトマホークを取り出しそれを投擲し、リトルボーイ数機を切り裂き竜馬の手に戻ってきキャッチする。

竜馬

「真っ二つになりやがれ！！」

そしてキャッチしたトマホークで次々とリトルボーイを切り裂いていく。

隼人

「コイツのスピードに付いて来れるか！！」

隼人はゲッター2のスピードを生かしながら、リトルボーイ達を翻弄する。

隼人

「喰らえ！！ドリルストーム！！」

ドリルから発生された竜巻にリトルボーイの大半が巻き込まれ、バラバラになり爆発していく。

武蔵

「逃がしゃしねぇ！！ゲッターアァァァム！！」

武蔵はゲッターアームで、リトルボーイを掴み、また別のリトルボーイに叩きつけ破壊する。

武蔵

「まだまだぁ！！元祖！大・雪・山おろしぃぃぃぃ！！」

更に、リトルボーイを何機かまとめてゲッターアームで掴み、大雪山おろしで投げ飛ばしていく。その影響で、投げ飛ばされたリトルボーイは空中でバラバラになり爆発していく。

竜馬

「コイツで……最後だぁ！！」

そして、竜馬が最後のリトルボーイを切り裂き、戦闘は終了した。

隼人

「シュバルツ、こちらの被害状況は？」

シュバルツ

「被害はプロトゲッター部隊の何名かが軽傷で済んでいますが、まともに動けるのは弁慶のプロトゲッター？改、俺のステルバー？改、マイケルのステルスボンバー？、そして、神隊長達のゲッターロボだけです」

大半の機体は、エネルギー切れと武装切れで動けずにいた。

竜馬

「気を付けろ！あの馬鹿がリトルボーイだけで終わる筈がねぇ！絶

対に何か仕掛けるに違いない！」

竜馬は、何時でも動けるようにトマホークを持ちながら警戒していた。

ピピピ！ピピピ！

すると、ゲッター２のプライベート・チャンネルに通信が入る。

隼人
「俺だ……何！？雷岳に向かって重量子ミサイルが発射されただと！？」

隼人は、通信してきたオペレーターの言葉に驚いていた。

弁慶
「お、おい！隼人、今の話は本当になのか！？」

隼人
「ああ！今から一時間後に、衛星から重量子ミサイルが雷岳に着弾する！」

竜馬
「ちぃ！あの野郎！破壊できないことが分かって強行に移したな！！」

竜馬はそう吐きちらす。重量子ミサイルは、着弾するだけで島の一つは軽く吹き飛ばしてしまう兵器である。

隼人

「全作業員は直ちにこの場から退避！動けるプロトゲッター部隊は負傷者を連れて退避しろ！急げ！！」

隼人は、各部隊に指示して退却準備をしていた。

竜馬
「隼人！確かあの輸送車に強化型ミサイルマシンガンとハイパーレールガン、それから打ち上げ用のロケットエンジンがあったよな！？」

隼人
「確かにあったが、それがどうしたんだ！」

竜馬
「俺が空に上がって宇宙で重量子ミサイルを破壊する！」

武蔵
「ば、馬鹿な事をするな！確かにスペック上、ゲッターは宇宙でも使えるがそんな事をすればお前が危ないぞ！？」

武蔵は、竜馬の案に反対する。

竜馬
「だが、これしか方法が無いんだよ！」

隼人
「……分かった。竜馬、頼む」

弁慶
「は、隼人！？」

隼人と言葉に、驚く弁慶と武蔵。

隼人
「だが！これだけは約束しろ！」

竜馬
「ん？」

隼人
「絶対に死ぬな！お前が死ねば、真耶が悲しむ」

隼人にそう言われ、竜馬は自分の最愛の妻の事を思い浮かべた。

竜馬
「……ああ、俺には大切な家族がいるからな。まだ死ぬねぇよ！」

竜馬はそう言って、輸送車から強化型ミサイルマシンガンとハイパーレールガンと取り出し、そして両足にロケットエンジンを取り付ける。

竜馬
「それじゃ、行って来るぜ！」

そう言って竜馬はロケットエンジンを噴かせながら空に上がって行った。

隼人
「頼むぞ……竜馬」

果たして、竜馬は重量子ミサイルを破壊できるのか？それは次回、明らかになる。

プロローグ？（後書き）

次回、プロローグファイナル！お楽しみに！

プロローグファイナル！（前書き）

プロローグファイナルです。どうぞ！

プロローグファイナル！

ロケットエンジンで宇宙に上がった竜馬は、エンジンを切り離しす。

竜馬
「よし！ゲッタァァァウィング！！」

そして、背中にマントを出しそのまま重量子ミサイルの向かいながら、左手に持っていたハイパーレールガンを構え、エネルギーをチャージする。そして、重量子ミサイルが姿を現すと竜馬は狙いを定めた。

竜馬
「喰らいやがれぇぇぇぇぇ！！」

キュイィィィィィン……ドシュンッ！！！

ハイパーレールガンから放たれた弾丸は真っ直ぐにミサイルに向かっていき、そして着弾するが、ミサイルの装甲を凹ませただけで止まる。

竜馬
「クソッ！質量が違う上に装甲が厚いから一発じゃ壊せねぇか！！」

そう言って竜馬はミサイルマシンガンも一緒に構え、レールガンと同時に撃ちだす。

ズドドドドドドッ！！！

ドシュンドシュンドシュンッ！！！

次々と放たれ、ミサイルに当たるがそれでもなお破壊するまでにはいたらない。

竜馬
「クソッ！だったら……！」

竜馬は両手の武器を投げ捨てる。

竜馬
「こいつでどうだ！！ゲッタァァァァ！ビィィィィム！！」

最大出力のゲッタービームを放ち、破壊しようとする。

竜馬
「うおォォォォォォ！！！」

竜馬はゲッタービームの出力を更に上げるとミサイルは先端の方からひび割れ始める。

竜馬
「これで……終わりだァァァ！」

そして、ゲッタービームは重量子ミサイルを貫き通し、そして爆発した。竜馬を巻き込んで……

◇

～真耶視点～

パキィンッ！

真耶
「えぇ！？」

竜馬がミサイルの爆発に巻き込まれていたその後、東京のとある一軒家で自分の息子の面倒を見ていた真耶は、竜馬が真耶の誕生日に貰ったネックレスのチェーンが切れた事に驚いた。

？？？
「ど、どうしたの！？なんかすごい声出していたけど！？」

そう言って、真耶に聞いてきたのは早乙女博士の娘で神隼人の彼女の『早乙女ミチル』である。

真耶
「そ、それがいきなりリョウ君から貰ったネックレスが……」

そう言って真耶はミチルにチェーンの切れたネックレスを見せる。

ミチル
「あっちゃ～、これは綺麗にチェーンが切れているわね」

真耶
「うぅ…υせっかくのお気に入りだったのに～～υ」

真耶は肩を落としながらネックレスを見ていたが、実際は心の中で

あることを考えていた。

真耶
（でも……何だろ……この胸騒ぎは……）

真耶は、胸を押さえながら窓の外を見る。

真耶
「……リョウ君。無事……だよね？」

自分の夫でもある竜馬の事を心配しながら、ベビーベッドにスヤスヤと寝ている自分と竜馬の間に生まれた我が子である『流竜牙』を見ていた。

そして、雷岳に落ちる筈だった重量子ミサイルは墜ちずに宇宙圏で破壊された。だが、その際にミサイルを破壊した竜馬は、行方不明となる……。

プロローグファイナル！（後書き）

次回、新たなるゲッターの申し子！お楽しみに！

第１話：新たなるゲッターの申し子！（前書き）

早速の一話目です。やっと主人公を出せます。ちなみに、この小説での設定は主人公の年は１４歳で真耶が１６歳で主人公を生んでいるので現在は２７歳となっております。それでは、どうぞ！

第1話：新たなるゲッターの申し子！

竜馬が行方不明になってから約１１年ぐらいが過ぎた現在、早乙女研究所の訓練所ではある一人の少年がストレッチをしていた。そして、その傍らには量産型のプロトゲッター一号機改が待機状態で立っていた。

弁慶
『それじゃあ、これから訓練を開始する。“竜牙”！準備いいか？』

竜牙
「何時でも良いぜ！弁慶のおっちゃん！」

そう、この少年こそ真耶と竜馬の子供である流竜牙であった。あれから成長し、早乙女研究所で訓練をしていたのだ。

弁慶
『そうか。だがあまり無茶苦茶にやるなよ？いくらお前が操縦が上手いからとはいえ、そう毎回も訓練用のプロトゲッターを壊されたらたまったもんじゃないんだからな』

竜牙
「うぅ…υそ、それは反省してるってυ」

竜牙は困った顔をしながら頭を掻いていた。

弁慶
『まあいいか。それじゃあ乗り込んでくれ』

竜牙
「了解っと！」
そう言って竜牙は待機状態のプロトゲッター1号機改に乗り込み、システムを起動させるとバイザーが閉じて手を握ったり開いたりして問題がないか確認する。

弁慶
『よし！それじゃまずは出始めに打鉄から始めるぞ』
そう弁慶が言うと、竜牙の目の前に機械の人形で動いている一世代型量産ＩＳ『打鉄』が現れる。この打鉄は早乙女博士の開発した訓練用の擬似人形で動かせるようになった奴である。

弁慶
『それじゃあ……始め！！』
弁慶の合図をした瞬間、擬似人形が右手に接近ブレードを出し竜牙に近づき切りかかる。

竜牙
「っへ！甘いんだよ！」
切りかかってきた擬似人形の攻撃を軽々くよけ、そして、擬似人形の頭を掴みそのまま地面に叩きつける。

竜牙
「喰らえ！！ゲッタァァァビィィィムッ！！」
そして、至近距離でゲッタービームを当て、擬似人形を戦闘不能に

する。

竜牙
「楽勝楽勝！弁慶のおっちゃん！次よろしく！」

弁慶
『分かってるって、次はラファール・リヴァイブだ』

次に出てきたのは、フランスのデュノア社が開発し量産されている第二世代型ＩＳ『ラファール・リヴァイブ』だった。ラファールを纏った擬似人形はアサルトライフルを構えると竜牙に向けて打ってきた。

竜牙
「よっと！軽い軽い！」

降ってくる弾丸の雨を竜牙は一発を当たらず軽々く避ける。

竜牙
「隙あり！ゲッタートマホーク！ブゥゥゥメランッ！」

竜牙はラファールの隙をつき、ゲッタートマホークを投げそして、ラファールを打鉄と同様に戦闘不能にする。

竜牙
「よし！弁慶のおっちゃん！次は？」

弁慶
『次はお待ちかねの……ゲッターだ』

弁慶がそう言って出したのは、かつての竜牙の父親である竜馬が使っていたプロトゲッターの正式機『初代ゲッター1』であった。

竜牙
「へへっ……やっとここまで来たぜ親父……」

竜牙はそう言って、ゲッタートマホークを取り出し、構える。

竜牙
「……行くぜぇ！！」

そして、竜牙はゲッター1に突っ込む。

◇

〜弁慶視点〜

竜牙がゲッター1との戦闘を訓練所のピットで見ていた弁慶はその様子を見守っていた。

隼人
「どうだ弁慶、竜牙の様子は？」

弁慶
「ああ、今ゲッター1と戦闘するところだ」

ちょうどピットに入ってきた隼人は弁慶に状況を聞いてきた。

弁慶
「やっぱり、あの戦闘スタイル。まんま竜馬のとそっくりだ」

隼人
「やはり、血は争えないって事だな」

隼人と弁慶は竜牙の戦闘を見ながらそう思っていた。

弁慶
「それで、先輩から連絡はあったのか？」

隼人
「ああ、未だに手がかりは無いだとさ」

弁慶
「そうか……まったく！竜馬の奴、一体どこにいるんだよ！」

弁慶は拳を強く握りしめながらそう言った。

隼人
「あの重量子ミサイルの爆発に巻き込まれたぐらいであいつが死ぬはずがない。だとすれば、あいつは必ずどこかにいる筈だ。後は、武蔵からの連絡を待つしかない」

隼人も、拳を握りしめながらそう信じていた。

◇

～竜牙視点～

あれからゲッター1戦闘していた竜牙は未だにゲッター1とゲッタートマホークでの斬り合いをしていた。

竜牙
（クッ…！流石は親父が使っていた正式機、パワーもスピードもプロトゲッターとは大違いだ……ッ！）

竜牙はそう思っていると、ゲッター1は竜牙の手からトマホークを叩い落とす。

竜牙
「しまっ……！！」

そして、ゲッター1はゲッタービームを竜牙に叩きつける。

竜牙
「いっててて……ッ！結構効くな～、流石はゲッター1。そう簡単には倒せないか……」

ゲッタービームを喰らい、壁に叩きつけられた竜牙はそう言いながら立ち上がる。

竜牙
「だが……だからこそ、負ける気はしないんだよな！」

そう言った竜牙は、ゲッター1に向かっていき、ゲッター1は竜牙に向かってもう一度ゲッタービームを撃とうと構えた。

竜牙
「それを待っていたぜ！」
そう言うと竜牙は上に大きくジャンプし、ゲッター1の背後に着地する。
竜牙
「いくら性能が違っていても、コンピューターにだって一定の隙が出来るんだよ！」
そして、竜牙はゲッター1を掴む。
竜牙
「喰らいやがれ！弁慶のおっちゃん直伝！大・雪・山・おろしっ！！！」
竜牙は弁慶から教えてもらった大雪山おろしでゲッター1を上に投げ飛ばす。
竜牙
「俺の……勝ちだァァァァ！」
そして、ゲッター1が地面に叩きつけられ、訓練終了のブザーがなった。

第1話：新たなるゲッターの申し子！（後書き）

次回、竜牙、ＩＳ学園に行く！お楽しみに！

第２話：竜牙、ＩＳ学園に行く！（前書き）

第２話が出来ました。見てくれると有り難いです！では、始まります！

第2話：竜牙、ＩＳ学園に行く！

竜牙
「ふ～っ。やっと終わったぜ」

訓練が終わり、プロトゲッター1号機改を研究員に渡した後、竜牙はＩＳスーツを脱ぎ、私服に着替えていた。

竜牙
「さぁてと、着替え終わったし食堂にでも行くか」

着替え終わった竜牙はそう言って、更衣室から出て食堂に向かって歩きだす。そして、途中まで歩いていると竜牙の目に見知った人物を見つけた。

竜牙
「お！あれは……お～いマドカ！」

マドカ
「ん？ああ、竜牙か……今訓練が終わったのか？」

竜牙
「おう、ちょうど終わって食堂に向かうところなんだが、お前も一緒にどうだ？」

マドカ
「ああ、構わないぞ。ちょうど私も行くところだ」

今竜牙と会話をしているのは、同じ早乙女研究所でゲッターの操縦

者であり早乙女博士の義理の娘の『早乙女マドカ』である。しかも、マドカの顔はあの最強のＩＳ操縦者である『織斑千冬』にそっくりである。何故ここまで似ているのかというのはまた何時か話すであろう。

マドカ
「ところで、今回の訓練はやはり擬似人形での戦闘訓練だったのか？」

竜牙と一緒に食堂へと歩きながらマドカは竜牙に聞いてきた。

竜牙
「当たり。今回は打鉄とラファールと戦闘した後、最後にゲッター１と戦ったぜ」

マドカ
「そうか。勝てたのか？」

竜牙
「打鉄とラファールは簡単に倒せたが、やっぱりゲッター１は苦戦したよ。まぁ勝ったけどな」

マドカ
「だが、これでまた一歩お前の父親に近づけたんだろ？」

竜牙
「ああ、だがまだまだこれからだ。俺はもっと上を目指す、そして、親父が帰って来るまでに絶対に親父を超えてみせる！」

竜牙は笑顔を浮かべながらそう強く言った。

マドカ
「そうか……だが、あまり無茶はするなよ？お前にもしものことがあったら私がつらいからな……」
マドカは少し心配しながら竜牙に言ってきた。
竜牙
「心配すんなって！俺は何があっても死ぬ気は無いからよ！」
マドカ
「……そう…だな。だったら、私もお前の背中を守れるぐらいに強くなるから、それまで待ってろ」
竜牙
「ああ、楽しみにしているぜ！」
竜牙はそう笑顔で言うと、マドカも安心したように笑った。若干顔を赤らめていたが……。

◇

～第三者視点～
竜牙がマドカと食堂に向かっているその頃、研究所の格納庫では竜牙が使っていたプロトゲッター1号機改からゲッター炉心を取り出してデータ収集をしていた。

隼人
「どうですか博士？」

早乙女
「うむ、やはり前回よりもさらにゲッター線との同調率が上がっている」

隼人と弁慶は、早乙女と一緒にモニターに現れる竜牙とゲッター線との同調率を表したデータを見ていた。

隼人
「やはり竜牙とマドカも、俺や竜馬、武蔵や弁慶と同じくゲッターに選ばれた存在……というわけですね」

早乙女
「そうなるやもしれんな。マドカも竜牙と同じくゲッター線との相性がある。だが、やはり竜牙の方がマドカよりも更に相性が高い」

早乙女はそう言って、プロトゲッター1号機改の炉心を隣にあるゲッター1と同タイプの機体に取り付けを開始する。

弁慶
「新型のゲッターロボ……プロトゲッター1号機に使用していた新型の炉心とプラズマ炉心を動力源として稼働する次世代型……いよいよこれを竜牙に……」

早乙女
「うむ、11年も掛かったが、これを託す時が来た」

隼人

「ですね。まあいい加減に真耶に竜牙を返さないとな」

隼人と額に汗を掻きながら苦笑いした。

弁慶

「た、確かになぃそういえば真耶ちゃんは今“あの学園”にいるんだよな？」

隼人

「ああ、どうせ竜牙にある事を頼む為に“あそこ”にやるしな」

弁慶

「ん？ある事？なんなんだそれは？」

隼人と言葉に弁慶は疑問に思う。

隼人

「ああ、それはーーー」

◇

～竜牙視点～

竜牙

「は？“ＩＳ学園”に入れだぁ？一体どういうことなんだよ隼人のおっちゃん？」

隼人に呼ばれた竜牙は、その言葉にかなり変に思っていた。

隼人
「そのままの意味だ。お前にＩＳ学園に入学してもらいたいんだ」
竜牙
「いやいや、隼人のおっちゃん？あそこって確か女しか入学できねぇだろ？男の俺が入学できる訳ないだろうが」
竜牙のいう通り、ＩＳ学園はＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関であるのでそこに入れるのは、各国からの女性だけなのだ。
隼人
「ああ、だがそのＩＳにイレギュラーが発生したんだ」
竜牙
「イレギュラー？」
隼人
「そう……世界初の男のＩＳ操縦者が現れたんだ。これを見ろ」
隼人はそう言って、竜牙に資料を渡す。
竜牙
「えーと何々？『世界で唯一ＩＳを使える男“織斑一夏”』？織斑って言うとあの……」
隼人
「そうあの元日本代表である“織斑千冬”の弟だ」
竜牙

「おいおい…マジかよ。ん？だがおかしくないか？いくらあの織斑千冬の弟だからって、この一夏って奴は男だろ？いくら何でも絶対に変だって」

隼人
「だからこそ、お前には“世界で2人目のＩＳ操縦者”としてＩＳ学園に行って欲しいんだ。ちなみ、手続きはこっちで済ませてあるから安心しろ」

竜牙
「なるほどな。要するに、何かあるかもしれないから調べてくれって事なんだな？分かった。良いぜ、乗ってやるよ」

竜牙はそう言って、隼人の申し出に答えた。

隼人
「そう言ってくれると有り難い。ああ、それから、ＩＳ学園には真耶もいるからな。久しぶりに会えるだろ？」

竜牙
「え？母さんもいるのか？」

隼人
「そうだ。そこで教師をしている」

竜牙
「知らんかったぃ」

竜牙は内心、自分の母親にはもう五年近く連絡していないのでそういった事をわかっていなかったのだ。

隼人
「それじゃ、外に車を用意しているからこのＩＳ学園の制服を着てすぐに行ってくれ」

隼人はそう言って竜牙に制服を渡す。

隼人
「それからお前の専用機は数日ぐらいに届けるからな」

竜牙
「分かった。そんじゃ行って来るぜ！」

竜牙はそう隼人に言って部屋から出ていった。

◇

～第三者視点～

真耶
「全員揃ってますね？それじゃあＳＨＲを始めますよー」

黒板の前でにっこりと微笑むこのＩＳ学園一年一組の教室の副担任で竜牙の母親の『流真耶（旧名山田真耶）』である。

真耶
「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。じゃあまずは

自己紹介をお願いします。では、出席番号順でお願いします」

真耶はテキパキとＳＨＲを進めていた。そんな中、このクラスでただ一人の男である一夏は緊張していた。

一夏

（これは……想像以上にキツい……ｕ）

そう思って何かしらの救いを求めて幼なじみの『篠ノ之箒』に送ったがふいっと窓の外に顔をそらされた。

真耶

「……くん。織斑一夏くん？」

一夏

「は、はい！？」

いきなり名前を呼ばれた一夏は思わず声が裏返ってしまう。

真耶

「あ、ゴメンね。今自己紹介が『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だから前に出て自己紹介してくれるかな？」

一夏

「あ、はい。分かりました」

一夏はそう言って、黒板の前に立つ。だが…

一夏

（うっ……）

さっきまで背中で感じていただけの視線が一気に一夏にむけられ、更にたじろぐ。

一夏
「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう言って頭を下げ、そして上げるが、視線が『もっと色々喋ってよ』的であった。そして、この状況で考えた一夏の答えたはと言うと。

一夏
「以上です」

ガタタタっ！

一夏の一言で数人の女子が思わずずっこけた。

真耶
「あ、あはははは……ゞ」

一夏の後ろにいた真耶は少し苦笑いをしていた。すると、一夏の背後から誰かが現れ、パァンッ！と一夏の頭を叩いた。

一夏
「いっーーー！？」

一夏は頭を抑えながら後ろを向くとそこには一夏のよく知る人物だった。

一夏
「げぇっ！関羽！？」

パァンッ！

千冬
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

そう言って、千冬は一夏の頭をまた叩き言った。

真耶
「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

千冬
「ああ、流君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

真耶
「いえ、副担任ですので、これくらいは余裕ですよ」

真耶は笑顔で千冬にそう言う。

千冬
「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな？」

千冬がクラスにそう言うと教室は黄色い声援が響いた。

女子A
「キャーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」
女子B
「ずっとファンでした！」
女子C
「あの千冬様のご指導いただけるなんて嬉しいです！」
女子D
「私、お姉様の為なら死ねます！」
きゃいきゃいと騒ぐ女子達を千冬はかなり鬱陶しそうな顔で見る。
千冬
「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」
本当に鬱陶しそう言うが、逆効果であった。
女子A
「キャアアアア！お姉様！もっと叱って！罵って！」
女子B
「でも時には優しくして！」
女子C
「そしてつけあがらないように躾をして～！」
余りにものS発言に千冬と真耶、そして2人の隣にいた一夏は若干

引いた。

千冬
「ご、ゴホンッ！で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

少し咳払いをし、千冬は一夏にそう言う。

一夏
「いや、千冬姉、俺はーー」

パァンッ！

千冬
「織斑先生と呼べ」

一夏
「……はい、織斑先生ゅ」

女子A
「え？織斑くんって、あの千冬様の弟…？」

女子B
「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

女子C
「ああっ、いいなぁ、代わってほしいなぁっ」

千冬と一夏のやりとりに、周りも2人が姉弟だと知る。

千冬
「さて、突然だがこのクラスに転入してきた生徒を紹介しよう」

真耶
「え？転入生ですか？」

千冬の言葉に真耶は少し驚いた。

千冬
「ああ、今さっきちょうどこの学園に着いて私が迎えに行っていたのだ。それでは、入って来い」

千冬がそう言うと教室のドアが開き、入ってきたのは男物のＩＳ学園の制服を前だけ開いた状況で着込み、首には赤色の少しボロボロなマフラーを巻いた少年だった。

真耶
「……えっ！」

千冬
「それでは、自己紹介しろ」

竜牙
「はいはい、初めまして、俺の名は流竜牙だ。これから三年間この学園でお前らと一緒に学ぶのでよろしく！」

そう言って笑顔で答える竜牙だったが、クラスの皆はいきなり沈黙する。

竜牙

「あり？なんかマズい事言ったか？」

竜牙は不思議そうに首を傾げる。

女子達

『……き』

竜牙

「き？」

女子達

『キャアアアア！！』

竜牙

「うおっ！？」

突然の歓声に竜牙はかなりびひる。

女子Ａ

「男よ！男！？しかも、２人目の！？」

女子Ｂ

「少しワイルドさがある上に織斑と同じ位格好いい！！」

等々と竜牙に対する感想が飛んでくる。

千冬

「ええい、静まれ馬鹿者共！」

そう千冬が言うとピタッと止まった。だが、そんな中真耶は震えな

がら竜牙に声をかけた。

真耶
「も、もしかして……竜牙……なの？」

竜牙
「ん？オッス！久しぶり！元気してたか？」

竜牙は元気よく真耶に言った瞬間、真耶は竜牙に抱きつき、クラスの皆と千冬は驚く。

真耶
「ふぇぇぇん！！寂しかったよぉ竜牙！！」

竜牙
「っと！ただいま……母さん……」

全員（千冬を含めて）
『え、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？か、母さん！？』

竜牙の発言にクラスの女子達と千冬は驚いた。
こうして、竜牙は母親である真耶と１１年振りの再会したのだ。余談だが、あの後、真耶が既に結婚していた事が分かると、何故か千冬は肩を落としていたようだ。

第2話：竜牙、ＩＳ学園に行く！（後書き）

次回、金髪ロールと挑戦状。お楽しみに！

後、竜牙の初期専用機を新・ゲッターロボのゲッター1かネオゲッターロボのどちらかにしたいのですが、もし、このどちらかに希望がある人がいたら感想をください。

第3話：金髪ロールと挑戦状（前書き）

第三話目です。今回、真耶が少し（？）キャラ崩壊します。では、どうぞ！

第3話：金髪ロールと挑戦状

あの後、ＳＨＲが終わり一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わり今は休み時間。竜牙は一時間目の授業のまとめをしていた。

一夏
「よお！」

竜牙
「ん？ああ、あの時織斑先生の隣にいた……」

竜牙は話掛けてきた一夏に気づき一旦書くのを止める。

一夏
「ああ、俺は織斑一夏。同じ男同士、仲良くしようぜ！」

竜牙
「よろしくな！一夏！俺の事は気楽に竜牙って呼んでくれや！」

一夏
「ああ！分かった！」

竜牙と一夏が話していると箒が近づいてきた。

箒
「……ちょっといいか？」

一夏
「え？箒？」

竜牙
「知り合いだろ？行ってこいや」

一夏
「あ、ああ。分かった。じゃあまた後でな」

箒
「早くしろ」

一夏
「お、おう」

一夏はそう言って、箒と共に廊下に出て行ったのを見送った後、竜牙は書くのを再会した。

◇

あれからまた過ぎ、二時間目の休み時間、竜牙は一夏に二時間目の授業の事を教えていると金髪ロールの女子が声を掛けてきた。

？？？
「ちょっと、よろしくて？」

一夏
「へ？」

竜牙
「あ？」
竜牙と一夏はいきなり声を掛けてきた女子に素っ頓狂な声を出す。
？？？
「訊いてます？お返事は？」
一夏
「あ、ああ。訊いているけど……どういう用件だ？」
竜牙
「……」
竜牙は黙りながら女子を見ていて変わりに一夏が返事をする。
？？？
「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応のというものがあるんではないかしら？」
竜牙
「そんなの知るかよ。大体、俺らはテメェのなんか知らねえし」
竜牙は女子を呆れながら見てそう言った。
セシリア
「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして入試主席のこのわたくしを！？」

そうセシリアがそう言うが、竜牙はコイツ何を自信満々に言ってんだ？って顔をしていた。

一夏
「あ、質問いいか？」

セシリア
「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一夏
「代表候補生って……何？」

ガンッ！がたたたッ！

聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけ、竜牙は近くの机に強く頭を打った。

セシリア
「あ、あ、あ……」

一夏
「『あ』？」

セシリア
「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

一夏
「おう。知らん」

竜牙
「どや顔で言うなぅ」
竜牙は呆れながら一夏に説明する。
竜牙
「えーとだな。国家から代表ＩＳ操縦者を決めるためにその国から候補生として選出された人物……まぁ、俗に言うエリートだな」
セシリア
「そう！エリートなのですわ！」
セシリアは竜牙の一言で復活し、びしっと一夏と竜牙に人差し指を立てる。
セシリア
「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」
竜牙＆一夏
「「そうか。それはラッキーだ」」
セシリア
「……馬鹿にしていますの？」
竜牙は、テメェが幸運だと言ったんだろうがっと内心思っていた。
セシリア
「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた達のような人

間にも優しくしてあげますわ」

セシリアの言葉を竜牙はうざそうに聞き流す。

セシリア
「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

一夏
「入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うって奴？」

セシリア
「それ以外に入試などありませんわ」

一夏
「あれ？俺も倒したぞ。教官」

セシリア
「は……？」

竜牙
「ほぉ。初心者なのにやるな一夏！」

一夏の言葉にセシリアは固まり、竜牙は感心したように言う。

セシリア
「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

竜牙

「そいつはあれだ。女子だけでのってオチだろ？」

竜牙が言うと空気がピシッと氷が割れるような音が聞こえた。

セシリア

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

一夏

「いや、知らないけど」

セシリア

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

竜牙

「いや、俺の場合は入試無しでの入学だからな。（実際にＩＳ適正はあるが、ゲッター以外の機体に乗る気はねぇし）」

セシリアに聞かれた竜牙は、適当にそう言うと三時間目開始のチャイムが鳴った。

セシリア

「っ……！また後で来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

そう言ってセシリアは自分の席に戻って行き、竜牙は二度と来るなよ～と言いながら席に着く。

◇

千冬
「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目の授業の担当は真耶ではなく千冬であった。

千冬
「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬が言う。

千冬
「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まぁようするにクラス長だ」

ざわざわと教室が色めき立つ中、竜牙が手を上げる。

竜牙
「織斑先生、俺がクラス代表やります」

何故竜牙が自分からやると言ったのは、小学生の頃からクラス長などをやっていた事もあるが、竜牙には別の目的があるのだが、それは後々分かると思われる。

千冬
「では、候補者は流竜牙……他にはいないか？いないなら無投票当選だぞ」

千冬が周りに聞いてみると、クラスの皆は竜牙で問題ないと頷いて

いて、真耶も嬉しそうに竜牙を見ていた。

セシリア
「待ってください！納得がいきませんわ！」

突然の甲高い声が聞こえ、竜牙はうんざりしたような顔をしながら後ろを向くとあのセシリア・オルコットが立ったいた。

セシリア
「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくし、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

そこまで言ってねぇだろうが……っと竜牙は心の中でツッコむ。

セシリア
「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

竜牙
「じゃあ何故自分から立候補しねぇんだよ。そんなにこの日本で学びたくないんだったら自分の国に帰れ」

セシリア
「なっ……！？」

そう竜牙はセシリアに言う。

一夏
「それに、イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」
竜牙に続き頭にきていた一夏も言う。
セシリア
「あ、あ、あなた達ねぇ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
竜牙
「最初に侮辱してきたのはテメェの方だろうが」
そうして、しばらく竜牙と一夏はセシリアとにらみ合い、そしてしびれを切らしたのかセシリアは机を叩き言った。
セシリア
「決闘ですわ！」
一夏
「おう。いいぜ。四の五の言うよりは分かりやすい」
竜牙
「そうだな。一々言い争うよりがまだましだ」
セシリア
「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」
竜牙
「はっ！馬鹿言うな。何故真剣勝負に手を抜く必要があるんだよ」

一夏
「そうだな。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

セシリア
「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

セシリアはそう言うが、竜牙にとってはあまりセシリアを強そうには思っていなかった。

竜牙
「ところで、ハンデはどのくれぇつけたいか？」

セシリア
「あら、早速お願いかしら？」

一夏
「いや、俺達がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

と、そこまで言うとクラスからドッと爆笑が巻き起こった。

女子A
「お、織斑君達、それ本気で言ってるの？」

女子B
「男が女より強がったって、大昔の話だよ？」

女子C

「織斑君達は、確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

クラスの女子達は笑いながらそう言う中、ちょうど千冬の隣にいた真耶は言った。

真耶
「あまり……竜牙を甘く見ない方がいいですよ？」　ゴゴゴゴッ！

全員（竜牙以外）
『ヒィッ！？』

あまりにもの真耶の恐ろしさに竜牙を除いたクラス全員（千冬を含め）軽く引いていた。

真耶
「オルコットさん？（黒笑）」　ゴゴゴゴッ！

セシリア
「は、はい！？」

セシリアも真耶の恐ろしさに素っ頓狂な声を上げる。

真耶
「あなたがいくら代表候補生だからといって、調子に乗らないで下さいね？じゃないと……足下すくわれますよ？（黒笑）」

真耶が言うと、セシリアも少し涙目になりながらものすごい勢いで頷く。

竜牙

（さてはて、どうなることやらっていうか、母さん滅茶苦茶怖いんだがっ）

竜牙は、心の中でそう思っていた。こうして、竜牙と一夏は一週間後にセシリアと勝負する事になったのである。

第3話：金髪ロールと挑戦状（後書き）

第４話、竜牙、生徒会長との再会！お楽しみに！

第４話：竜牙、生徒会長と再会！（前書き）

第４話目です。今回はあの人が出ます。では、どうぞ！

第４話：竜牙、生徒会長と再会！

全授業が終わった放課後、竜牙と一夏は教室に残っていた。

一夏
「うぅ……」

竜牙
「大丈夫か一夏？」

机の上でぐったりとうなだれている一夏に竜牙は聞いていた。

一夏
「い、意味が分からん……ｕ。なんでこんなややこしいんだ……？」

竜牙
「参考書捨てたお前が悪いんだろ？自業自得だ」

竜牙はそう言ってため息を吐く。

真耶
「ああ、織斑君。それから竜牙、まだ教室にいたんですね。良かった」

竜牙
「あ、母さん。どうしたんだよ？」

教室に入ってきた真耶に竜牙は気づく。

真耶
「えっとね、寮の部屋が決まったの。それでそれを言いにきたの」
竜牙
「ああ、そういや隼人のおっさんがそんなこと言っていたな」
竜牙は此処に来る前に隼人から渡された手紙の内容を思い出す。
一夏
「あれ？俺の部屋、決まってないんじゃなかったんですか？前に聞いた話だと一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」
真耶
「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです」
そう、何せ竜牙達は今まで前例のない『男のＩＳ操縦者』なので、このようにしないとややこしい事になるのだ。
真耶
「そう言う訳で、政府特命もあってとにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。はい、これが鍵です」
そう言って真耶は一夏に『１０２５室』と書かれた鍵を、竜牙に『１０２６室』と書かれた鍵を渡す。
一夏
「分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないといけませんので、今日はもう帰って良いですか？」

真耶
「ああ、荷物ならーー」

千冬
「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

いつの間にか、教室のドアに立っていた千冬がそう言った。

一夏
「ど、どうもありがとうございます……ᵘ」

千冬
「まぁ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があれば良いだろう」

真耶
「竜牙の荷物も、さっき早乙女研究所に置いてあった物が届いているからね」

竜牙
「ありがとう母さん」

竜牙は真耶から手渡された旅行鞄とボストンバックを受け取り部屋に向かった。

◇

竜牙

「えーと、１０２６室って一夏の隣だな」
部屋に着いた竜牙は、ドアに鍵を差し込み部屋に入る。
ガチャッ
???
「ヤッホー！竜牙君、久しーー」
バタンッ！
竜牙
「……疲れたのか？まさかアイツがいるわけない……よな？」
そう言って竜牙はもう一度ドアを開いた。
ガチャッ
???
「もう、ひどいじゃない。いきなり閉めるなんて、お姉さんショック……」
竜牙
「なんでこの部屋にいるんだよ“楯無”ｕ」
そう、部屋にいたのはＩＳ学園二年生で生徒会長の『更識楯無』であった。実は竜牙は楯無とは研究所で知り合っているのだ。
楯無
「なんでって、私があなたと同室だからよ」

そう言って、口元に扇子を広げ、扇子には『同居』と書かれていた。

竜牙
「はっ？あんた二年生だろ？いくらなんでも無理だろ」

楯無
「出来るわよ？…生徒会長権限で」

竜牙
「無駄なとこで権限使うなよ…まぁ、知り合いなだけでまだマシか」

竜牙はそう言って、持ったいた旅行鞄とボストンバックをベッドの近くに置き、ベッドに座ると楯無が竜牙の後ろに回り、抱き締め始める。

竜牙
「ん？何だよ、いきなり？」

楯無
「ん～～？久しぶりの再会ハグ？」

竜牙
「なんだそりゃ」

竜牙は苦笑いしながらも、嫌がる事なくそのままじっと楯無の抱き付きを受け入れたのだった……。

第４話：竜牙、生徒会長と再会！（後書き）

次回、クラス代表決定戦と新たなるゲッター！お楽しみに！

番外編１『良い事は連続して起こらないくせに、悪い事は連続して起こるもんだ

今回は番外編です。そんでもって、オリキャラで真耶の父親が出ます。あと、武蔵の災難劇です。ではどうぞ！ちなみに、ネタは銀魂の自分なりのアレンジです。

番外編1『良い事は連続して起こらないくせに、悪い事は連続して起こるもんだ

お天気キャスター
『ーー全国的に爽やかな秋晴れになるもようでございますが、女の秋の空は移ろいやすいものですから、もし降ってきても私のせいにしないでくださいね』

まだ竜牙が生まれていなく、竜馬が真耶と付き合い始めた頃の話。
ある朝、武蔵は歯を磨きながらテレビを見ていた。ちなみに、隼人達も近くで武蔵と一緒にテレビを見ている。

お天気キャスター
『それでは今日のブラック星座占いです。今日最も一番ツイていない方は“乙女座のあなたです。今日何をやってもうまくいけません』

武蔵
「なんだよ～朝からテンション下がるな～」

武蔵はそう言いながらテンション下げ目で続きを聞いていた。

お天気キャスター
『特に乙女座で、何時も緑色の帽子を被っていて今、歯を磨いている方、今日死にます♪』

武蔵
「……え〝え〝え〝え〝え〝え〝え〝！！」

お天気キャスターの一言に武蔵は目が跳びれる位に驚いた。

お天気キャスター
『幸運を切り開くラッキーカラーは赤。何か赤い物で血にまみれた身体を隠しましょう』

武蔵
「どんなラッキー！？全然何にも切り開けてねぇじゃないか！！」

お天気キャスター
『それでは楽しい週末を～～♪』

武蔵
「送れるかァァァ！！」

そう言うと怒りながらテレビを消した。

武蔵
「全く、何ちゅー不愉快な番組だ。こんなん見ている奴がいるのか？バカらしい！こんなものあたるわけねぇ。世の中の乙女座が消えて見ろ？乙女座の奴らみんな消えるだろうが……なぁ、弁慶？」

そう言って弁慶に顔を向けると、弁慶が赤い褌をを渡してきた。

弁慶
「はいコレ、俺が昔使ったいた赤褌。大丈夫、洗ってますから」

そう言い残し、弁慶は部屋から出て行った。

武蔵
「大丈夫って……何が大丈夫なんだよ∪弁慶の奴め、意外と心配性な奴だな。なぁ、隼人？」

そう言いながら、今度は隼人の方を向くと隼人は赤いマフラーを武蔵に渡してきた。

隼人
「…コレ、俺が昔パイロットスーツに使っていた赤マフラー」

そう言い残し、弁慶と同様に部屋から出て行った。

武蔵
「……え？ちょっ…やめろよ～何？なんかあったの？」

武蔵はそう言いながら冷や汗を掻いていると、いきなり部屋に向かってくる足音が聞こえてきた。

ドタドタッ！

ドゴォンッ！！

？？？

「この腐れゴリラァァァァ！！」

武蔵
「ぐわばっ！！」

いきなり部屋の怒鳴り込んできてきた四十代位のグラサンを掛けたおっさんが武蔵を蹴り、武蔵は蹴られた所をさすりながら蹴った張本人を見て驚いた。

武蔵

「げっ！？真耶ちゃんの親父さん！！」

そう、このおっさんこそ真耶の父親でもある男『山田片栗虎』である。そして、片栗虎は懐から拳銃を取り出しながら言った。

片栗虎
「……武蔵（ゴリラ）立てコノヤロー。三秒以内に立たねーと頭、ぶち抜く。ハァイ、1…」

ドォン！

武蔵
「2と3はァァァ！！」

三秒数えない内に引き金を引き、放たれた弾丸を避けながら武蔵は突っ込む。

片栗虎
「知らねーな、そんな数字。男はなァ、1だけ覚えとけば生きていけるんだよ」

武蔵
「さっき自分で3秒って言ったじゃねーか！？何なんだよ！！いくら真耶ちゃんの父親だからってやって良い事と悪い事があるぞ！！」

片栗虎
「何言ってやがんでぇ。お前のせいでなぁ…オジさんは…オジさんは真耶に嫌われるかも知れねーんだよ」

武蔵

「はァ！？何の話！？」

片栗虎
「あーもう！まだ孫の顔も見てないのによぉ！娘へのサプライズが全部パーじゃねぇか！どーしてくれんだぁ！！！」

パンパンパンッ！！

武蔵
「ギャアアアアアッ！！」

また暴れ出した片栗虎を止めるのに戸惑う武蔵だった。続きは後半にて続く。

番外編１『良い事は連続して起こらないくせに、悪い事は連続して起こるもんだ

後編は時間が空いた時に書きます。お楽しみに待っていて下さい！

第5話：クラス代表決定戦と新たなるゲッター！（前書き）

第5話です！遂に竜牙のゲッターロボが登場します！ではどうぞ！

第5話：クラス代表決定戦と新たなるゲッター！

あれから翌週の月曜。セシリアとの対決の日。竜牙は楯無と共に朝食を食べていた。

楯無
「で？どうなの？」

竜牙
「……？何がだ？」

楯無
「今日はあのセシリアって子との対決だけど、勝てる自信は？」

竜牙
「ああ、その事な。自信は十分にある。ていうか、お前わかっていて言ってんだろ？」

竜牙は自分の和食セットの味噌汁を啜りながら楯無に言った。

楯無
「まぁね。なんせ、あなたは私に勝った唯一の人だからね。あの時はお姉さん驚いたなぁ」

竜牙
「と言っても、あの時はギリギリだったがな」

竜牙は過去に一度、楯無と模擬戦をしてなんとかギリギリで勝利しているのだ。

楯無
「そういえば、今日だったかしら？あなたの専用機が来るの」
竜牙
「ああ、ちょうど今日来るみたいだぜ」
竜牙は食い終わると、皿をまとめて茶を啜る。
楯無
「あなたの事だから負ける筈はないけど、無茶は駄目だからね？あの時みたいに“暴走”でもしたら……お姉さんは嫌だから」
楯無はそう暗い顔をしながらそう言う。
竜牙
「……心配すんなって、絶対に無茶だけはしねえから。だからそんな顔すんな」
竜牙はそう言いながら楯無の頭を撫でる。
楯無
「……もぅ、そんなのされたらお姉さん、惚れちゃうぞ？／／／」
竜牙
「それは嬉しい限りだな。楯無みたいな美人に惚れられるのならな」
竜牙は冗談半分の事を言う。
楯無

「……もう……鈍感……／／。でも……いっか／／／」
楯無は竜牙の撫でを嬉しそうにしていた。
◇
〜第三アリーナ〜
一夏
「……なぁ、箒」
箒
「なんだ、一夏」
一夏
「気のせいかもしれなあんだが」
箒
「そうか。気のせいだろう」
一夏
「ＩＳの事を教えてくれる話はどうなったんだ？」
箒
「……」
一夏
「目・を・そ・ら・す・な！」

竜牙
「一夏、お前まさか練習してこないのかよ」
竜牙は2人の会話を聞いて、やっていないことに気づく。
箒
「し、仕方ないだろう。一夏のＩＳもなかったのだから」
一夏
「まぁ、そうだけど……ってそうじゃない！知識とか基本的なことかあっただろ！」
箒
「……」
一夏
「だから目をそらすなっ！」
竜牙
「つまりアレか？一夏の専用機とかで結局練習出来なかったと？」
そう竜牙が言った後、箒と一夏は二人揃って目をそらした。
竜牙
「ハァ……ｕ先が思いやられるなｕ」
真耶
「織斑くん！竜牙！専用ＩＳが届きましたよ」

すると真耶がピットに入って来てそう言う。

千冬
「織斑、流、すぐに準備しろ。アリーナを使える時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ。特に織斑はな」

そう千冬が言った後、ピットの入口が開きそこにあったのは真っ白なＩＳと赤のＩＳに似た機体があり、竜牙は赤の方を見て驚いた。

竜牙
「コイツは……まさか……親父のゲッターロボ……？」

そう、この機体こそかつて竜馬が使用していたゲッターロボと同型のゲッター１であった。

真耶
「隼人くんからの伝言でね『こいつを使いこなせるのはあいつの血を受け継いでいるお前だけだ』って言っていたの。私も竜牙ならこの機体を使いこなせるって信じているから。なんせあなたは私とリョウくんとの子だもの！」

真耶はそう嬉しそうに言った。

千冬
「流、お前から先にやれ。織斑のはフォーマットとフィッティングに時間が掛かるからな」

竜牙
「了解！」

そう言って竜牙はすぐさまゲッター1に乗り込むと、ゲッターは待っていたかのように装甲を竜牙の体に合わせて閉じ、最後にヘッドを閉じるとそこには全身装甲（フル・スキン）の機体が姿を現した。

一夏
「これが竜牙の専用機……」

千冬
「男でも動かす事の出来る早乙女博士の開発したＩＳと同様の機体……」

竜牙は手を握ったり開いたりした後、ハイパーセンサーでセシリアの機体のスキャンし、ピット・ゲートまで進み顔を後ろに向けて真耶に言った。

竜牙
「母さん」

真耶
「何？」

竜牙
「行ってくるな」

真耶
「うん！行ってらっしゃい！」

竜牙
「ああ！……行くぜ！ゲッタァァァウィング！」

そう言って竜牙はマント型のウィングを出し、一気にピット・ゲートから出て、セシリアの所に向かっていった。

◇

セシリア
「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアの所に着いた竜牙空中で静止しマントをなびかせながらセシリアの言葉を聞いていた。

セシリア
「しかし、あなたの専用機は全身装甲（フル・スキン）ですか。ですがその機体でわたくしの『ブルー・ティアーズ』に挑もうなどとは愚かですわね！」

竜牙
「どうでもいいが、早く始めろよ。それとも怖いのか？」

竜牙がそう行ってセシリアを挑発すると、セシリアはキレた。

セシリア
「なっ！だったらお別れですわね！」

そう言ってセシリアは竜牙に向かって手に持っていた武装『スターライトmK？』を構えて竜牙に撃つ。

竜牙
「っへ！そんなもの簡単にーー！？」

竜牙はそう言って避けようとするが、突然動きを止まり、攻撃を喰らう。

竜牙
「クッ！直撃だけはなんとか避けたか……（何だ！？機体の動きが遅い！？）」

竜牙はそう思い、システムをチェックすると動力部と駆動系のところにエラーがおきていた。

竜牙
「（動力部と駆動系にエラーコード！？今まともに稼働しているのは……プラズマ炉心だけ！？使える武装！……トマホークとガトリング砲だけだと！？不味い……ッ！）」

そう、竜牙のゲッター1の主な動力部であるゲッター炉心に火が灯っておらず、まともに稼働しているのはプラズマ炉心だけであり、さらに使える武装がトマホークとガトリング砲だけと戦力がとんでもなく最悪な状態なのだ。

セシリア
「さぁ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

そう言ってセシリアはフィン状のパーツのブルー・ティアーズを展開してさらに攻撃を加えていく。

竜牙
「誰が踊るか！！ゲッタァァァァトマホーク！」

竜牙は肩からゲッタートマホークを右手に、左手に収納してあるガトリング砲を取り出し、応戦する。

◇

〜第三者視点〜

一方、ピットで竜牙とセシリアの戦闘を見ていた真耶は竜牙の異変に気づいていた。

真耶
「ゲッターの炉心だけにエラー！？そんな、なんで……」

千冬
「流君、その炉心に何か問題があるのか？」

千冬は真耶にそう質問した。

真耶
「……元々ゲッターロボはゲッター線と呼ばれる超エネルギーを動力源に稼働する機体です。今はプラズマ炉心でなんとか動いていますが、ゲッター線炉心が動かなければゲッター本来の力が発揮しないんです……」

一夏
「そんな……それじゃ竜牙が圧倒的に不利じゃんか！」

真耶はモニターに映るブルー・ティアーズに苦戦している竜牙を心配そうに見ていた。

◇

〜竜牙視点〜

セシリア
「……二十七分、持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

竜牙
「そいつはどうも……」

なんとかぎりぎりで保っていた竜牙であったがこの圧倒的な状況下でどうするか考えていた。

竜牙
「（さて、どうするか……今の状態じゃまともに使える武装がねぇからな。せめてゲッタービームが使えたらなぁ……）」

竜牙はそう考えながらセシリアのブルー・ティアーズを避けているとあることに気づく。

竜牙
「（……ん？そういえば、なんであいつビット兵器と一緒に攻撃しないんだ？……なるほど……そういう事か……！）」

そう思った竜牙はわざと隙を作ると、セシリアは空いている左手を

横に振ると周囲に待機していたビットが竜牙に向かっていきレーザーを放とうとしていた。

竜牙
「今だ！トマホークブゥゥゥゥメランッ！！」

竜牙の投げたトマホークはビットを切り裂き、真っ二つにされたビットは爆発した。

セシリア
「なんですって！？」

竜牙
「その兵器はテメェが一々命令しないと動かない！さらにその間、テメェはそれ以外の攻撃は一切不可能。ビット兵器は制御に意識を集中しないと動かないからな」

セシリア
「……ッ！！」

そう言って竜牙はさらに近くにいたビットを蹴り飛ばし、ガトリング砲で二基目を破壊する。

竜牙
「もらっーー！？」

さらに追撃をしようとしたその時、ゲッター1のシステムが突然止まりそのまま地面に叩きつけられた。

竜牙

「クッ……！今度はシステムトラブルかよ！？」
竜牙は何度も動かそうとするが、ゲッター1は死んだようにうんともすんとも動かない。
セシリア
「何なのか分かりませんが、これでフィナーレですわ！！」
そう言ってセシリアは腰部から広がるスカート状のアーマーを切り離し、竜牙に向かって放つ。
セシリア
「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」
向かってくるミサイルを見ながら、竜牙はある事を思い出していた。
竜牙
「（そういえば、博士が言ってたな…『力で動かすんじゃない。心で動かすんだ』って……そうか……俺は力任せで動かしていたんだな……ごめんなゲッター1……だが、どうしてもあいつを倒したい……だから……力を……力を貸してくれ！ゲッター！）」
そう強く心で思った瞬間、竜牙を緑色の光が包み込んだ。
ドカァァァァンッ！！
セシリア
「存外しぶとかったですが、所詮この程度。終わりですわ」
竜牙のいる所から巻き上がる煙を見ながらセシリアがそう言ってい

た次の瞬間！

ドッ！キィィィンッ！

セシリア

「なっ……！？」

突然煙を切り裂いて飛び出してきたのはそれぞれ赤、白、黄色の色をした3機の戦闘機だった。

竜牙

「チェェェェンジ！ゲッタァァァァァワンッ！！」

竜牙の声と共に3機の戦闘機が合体して手足を出し、そして最後に赤い戦闘機の先端が2つに割れ角になると頭が現れた。現れたのは確かにゲッター1であるが、だが竜牙の使っていたゲッターとは明らかに形状が変わっていた。

竜牙

「さぁ、第二ラウンドの始まりだぁ！行くぜ！！」

今ここに新たなゲッター、新ゲッターロボの誕生した瞬間だった。

第5話：クラス代表決定戦と新たなるゲッター！（後書き）

次回、新ゲッターの力！お楽しみに！

第６話：新ゲッターの力！（前書き）

第６話目です！竜牙がかなり最強です！後、かなり短いです。それでもよければ、どうぞ！

第6話：新ゲッターの力！

突然現れた戦闘機が合体して、全く新しいゲッターになった事にセシリアは驚いていた。

セシリア
「ま、まさか……一次移行（ファースト・シフト）！？あ、あなた、今まで初期設定だけで戦っていたって言うの！？」

竜牙
「お喋りしている暇があるのか？行くぜ！！」

竜牙はそう言うと、ものすごい速さでセシリアに向かってきた。

セシリア
「っな！？は、早い！」

竜牙
「オラァァァァァ！！」

ズカァン！

セシリア
「キャアッ！？」

竜牙のストレートパンチをモロに喰らったセシリアはアリーナの壁まで吹っ飛ぶ。

竜牙

「まだまだ！ゲッタァァァァトマホォォォォク！！」
竜牙は肩からハルバートのような形態に進化したゲッタートマホークを取り出し、セシリアに向かって切りかかる。
セシリア
「クッ！行きなさい！」
セシリアも負けじと、残りのブルー・ティアーズを竜牙に向かわせるが竜牙はトマホークで二機まとめて切り裂く。
セシリア
「そ、そんな……」
竜牙
「ハァァァァァァ！！」
そして、竜牙はセシリアを切り裂くと決着を告げるブザーが鳴った。
『試合終了。勝者ーー流竜牙』
◇
竜牙
「ふぅ～終わった終わった」
試合が終わった後、竜牙はセシリアと一夏の試合を一通り見て、解散となり、自分の部屋に戻ってきたのだ。ちなみに、竜牙の右腕に

は赤と白、黄色の色をした腕輪があり、それが新ゲッターの待機状態となっていた。

楯無
「お帰りなさい。私の思った通り、あなたが勝ったわね」

竜牙
「なんだ楯無、見ていたのかよ」

楯無
「まぁね。でも、私だけじゃないのよ？ねぇ？簪ちゃん？」

簪
「ね、姉さん……あまり押さないで……／／／」

竜牙
「あり？簪じゃねぇか、久しぶりだな。元気にしていたか？」

簪
「う、うん……久しぶり竜牙／／／」

そう言って竜牙の返事に答えたのは、楯無の妹で日本代表候補生の『更識簪』である。簪も早乙女研究所で知り合っていたのだ。前は、簪と楯無は少しギスギスしていたが、竜牙がこの2人の仲をよくし、今ではとても仲の良い姉妹になっていた。そして、その時、楯無と簪は竜牙のさりげない優しさに惚れ込んでいるのだ。

竜牙
「で、どうだった？俺の活躍は？」

簪
「とっても…か……格好良かったよ／／／それに……竜牙の専用機のゲッターロボも……／／／」

楯無
「私も格好いいって思ったわよ。さっすが、私の「言わせないよ姉さん……」ーってちょっと簪ちゃん、邪魔しないでよ！」

楯無が何かを言うとした瞬間、簪が楯無の言葉を遮った。

簪
「姉さん……抜け駆けは許さないから……」

楯無
「クッ……やるようになったわね簪ちゃん……」

竜牙
「……何がどうなっとんの、この状況……υ」

にらみ合いをしている2人を見ながら、竜牙はそう言っていた。

第６話：新ゲッターの力！（後書き）

次回、クラス代表就任パーティーと許嫁。お楽しみに！

第7話：クラス代表就任パーティーと許嫁（前書き）

第7話です。今回はあの中国娘が登場します。しかも、竜牙のアレです！では、始まります！

第7話：クラス代表就任パーティーと許嫁

4月も下旬と遅咲きの桜の花びらが全部無くなった頃、竜牙達は千冬の授業を受けていた。結局、クラス代表は竜牙となり、副代表は一夏となった。その際セシリアは一夏に対する接し方が変わった事に気付いた竜牙はセシリアが一夏に惚れていることに気付いたが、まぁその辺はほっといてもいいと思っていた。

竜牙
「……で？なんでお前は地面に激突しかけてんだよ」

一夏
「……面目ない」

そう言って竜牙は新ゲッターをまとい、片手で地面に激突しかけていた一夏を掴みながら溜め息をついていた。

箒
「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

竜牙
「あんな雑音のどこが教えただ、何が『ぐっ、とする感じだ。どんっ、という感覚だ。ずかーん、という具合だ。』ってなんだよ」

箒の言葉に竜牙は呆れながら言った。
その後、竜牙達は武装展開をした後、授業が終わり、解散となった。
ちなみに、一番武装の展開が早かったのは言うまでもなく竜牙であった。

◇

〜???視点〜

夜、ＩＳ学園の正面ゲート前に小柄な体に不釣り合いなボストンバックを持った少女が立っていた。

???

「ふぅん、ここがそうなんだ……」

そう言って少女は上着のポケットから一切れの紙を取り出した。

???

「本校舎一階総合事務受付……って、だからどこにあるのよ！」

少女は多少イライラとしながら紙を上着のポケットにねじ込む。

???

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ」

ぶつくさ言いながらもその足はともかく動いていた。

???

（それにしても、まさかアイツがＩＳを使えるなんてね……でも……せめて“あの子”もいたらなぁ……まぁ使えたとしてもあの子は“あの機体”以外使わないと思うけどね）

少女はおもむろにポケットから一枚の写真を取り出した。そこには、

記念写真であるのか少女と少女より二歳くらい離れた少年が写っていた。そう、写っていた少年こそまだ早乙女研究所にいた頃の竜牙である。

???

（竜牙……元気にしているかな……）

そう言って少女はまた歩き出した。数分後、総合事務受付を見つけ出し少女は事務員と話していた。

事務員

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、凰鈴音（ファン・リンイン）さん」

◇

女子Ａ

「というわけでっ！織斑くん達クラス代表決定おめでとう！」

『おめでと～！』

ぱんっ！ぱんぱーん。クラッカーの音が食堂に響き渡った。夜、竜牙は一夏達と共に就任パーティーをしていた。現在、竜牙は一夏達の様子を壁際で見ていた。

本音

「あれ～？リョーくんは織斑くん達の所に混ざらないの～？」

竜牙
「ん？本音か……まぁ別に混ざらないって訳じゃねぇんだが、たまには静かに食べたいんだよ。ていうか、正直あの２人の邪魔はしたくねぇしυ」

本音
「ああ～確かにね～υ」

ちょうど近くにいた、こちらも前に研究所で楯無達と共に知り合った使用人ののほほんさんこと本音である。そして、本音は竜牙の言う方を見るとそこには一夏を取り合うような感じで言い争いをしている箒とセシリアの姿があった。

本音
「それじゃあ～……はい、あ～ん♪」

竜牙
「なんだ？食わせてくれんのか？」

本音
「うん、そうだよ～♪前に早乙女研究所にいた時もしたよね～／／／」

本音は恥ずかしいのか顔を赤らめながら竜牙に言う。

竜牙
「そういやそうだったな。そんじゃ遠慮なく……あ～ん」

竜牙は特に気にしない様子で本音から差し出された玉子焼きを食べ

る。

本音
「どぉ～？美味しい～？」

竜牙
「おう！とても旨いなこの玉子焼き！」

竜牙が嬉しそうにしながら本音に言うと、本音は笑顔になった。

◇

次の日、竜牙は一夏達と共に教室に入るとなんだが騒がしいことに気づいた。

竜牙
「ん？なんだか騒がしいな」

一夏
「本当だ。なんだろうな？」

女子Ａ
「織斑くん達、おはよー。ねぇ、転校生の噂聞いた？」

近くにいた女子が竜牙達にそう言う。

一夏
「転校生？今の時期に？」

女子A
「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」
竜牙
「ふーん…中国…か…（そういや、アイツ…元気にしてんかな？）」
聞いていた竜牙は、ある人物の思い出していた。
女子A
「流くん、がんばってね！」
女子B
「フリーパスの為にもね！」
女子C
「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ！」
やいのやいのと楽しそうな女子一同に竜牙は「ああ」と適当に返事をしていた。
？？？
「……その情報、古いよ」
突然教室の入り口から聞こえた声にさっきまで騒いでいた女子一同はその方を向く。
？？？
「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で

きないから」

一夏
「鈴……？お前、鈴か？」

一夏はその少女の事を知っているようなのか少し驚いていた。

鈴
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たの……！？」

鈴はそう言いかけると竜牙を見た途端目を開いた。竜牙も鈴を見て驚いた様子だった。

鈴
「え……ま…まさか、竜牙……なの？」

竜牙
「お、驚いた。まさかお前が転校生だったとはな。久しぶり、元気にしていたか鈴？」

竜牙はそう言って片手を上げ鈴に言うと鈴はそのまま勢い良く竜牙に向かい抱き付いた。

鈴
「竜牙ーー！！会いたかったよーー！！」

だが、竜牙は軽く避けて鈴の抱き付きを回避する。

鈴

「もう！なんで避けるのよ！」

竜牙
「あのな……毎回会う度にそれは止めろったろうが！研究所いた時もそれされて頭を打ったんだからな！」

竜牙は鈴にそう言う。周りはどうなってんの？って顔をしていて一夏も何がなんだか分からないようだ。

竜牙
「つうか、いい加減自分の教室に戻らねえと鬼教官の織斑先生が来るぞ？」

鈴
「うぇ！？それはマズいわ！」

鈴はそう言って素早く教室の入り口に向かう途中、竜牙の方を向く。

鈴
「じゃあ竜牙！また昼休みに食堂で待っているから！」

そう言い残し鈴は自分の教室に持っていった。

一夏
「なぁ竜牙。お前、鈴とは知り合っていたのか？なんかとても仲良かったみたいだけど……」

竜牙
「ん？そりゃあアイツとは研究所で知り合っているし、アイツは俺の“許嫁”らしいぞ。つっても鈴の親が勝手に決めたらしいんだが

な」

全員

『え……えええええええええええええええっ！？』

竜牙の一言に、クラスから驚きの叫びが上がった。

第7話：クラス代表就任パーティーと許嫁（後書き）

次回、事情説明と修羅場。お楽しみに！

主人公設定（前書き）

主人公である竜牙の設定です。

主人公設定

名前：流竜牙

年齢：１４歳

専用機

新ゲッター→？？？→？？？。（後々判明）

設定

本作品の主人公で、竜馬と真耶の息子。性格・容姿・戦闘スタイルは殆ど父親である竜馬と一緒であり、ゲッター線との同調率がとんでもない位に高い。

楯無や簪などとは研究所で知り合っており、鈴とは彼女の親から許嫁（勝手に）にされており、鈴は前は一夏に好意を寄せていたが、竜牙の優しさに触れて今では竜牙に恋したようだ。

専用機：新ゲッターロボ

設定

竜牙の初期ゲッターロボがゲッター線による可能性の進化により生まれ変わった機体。動力は搭載していた新型のゲッター炉心とプラズマ炉心が融合したプラズマゲッター炉心であり、従来のゲッターロボよりも出力がかなり高いのが特徴である。また、大気中のゲッター線を吸収する事により新ゲッターの性能を数倍に出来る。

新ゲッター１の武装。

ゲッタートマホーク

ダブルゲッタートマホーク（連結時）
ゲッターレザーブレード
新ゲッタービームキャノン
ゲッタービーム
ファイナルゲッタートマホーク
ファイナルゲッタービーム

新ゲッター2の武装。
ゲッタードリル
ドリルミサイル
プラズマドリルハリケーン
ゲッタービィジョン
ファイナルプラズマゲッタードリル

新ゲッター3の武装。
ゲッターアーム
ゲッターミサイル×2
ミサイルストーム
大雪山おろし
稲妻大雪山おろし

主人公設定（後書き）

後々竜牙の乗るゲッターを考えていく方針です。

番外編1『謎の青年、現れて別世界行き！』（前書き）

今回は番外編です！次回に剣聖龍さんから許可を頂いた、完結した作品の主人公を出します。ちなみに、これは時系列は関係ないですのであしからず！

番外編１『謎の青年、現れて別世界行き！』

鈴
「へぇーそんな事があったんだ」

竜牙
「ああ、あの時は驚いたんだぜ？いきなり練習機が滅茶苦茶強くなったから何だって思ったら弁慶のおっちゃんがレベル設定間違えてたんだからよ」

真耶
「そうなんだ……弁慶くん……後で“オハナシ”しなくちゃ……」

竜牙
「母さん……お話しの読みが片言になってんだが……ｕ」

竜牙は冷や汗を掻きながら真耶にツッコんでいた。現在ＩＳ学園がゴールデンウィークの長期休みに入ったので竜牙は真耶と一緒に自分たちの自宅に帰ってきていた。その途中、鈴も暇だったので付いてきたのだ。そして今、３人はリビングで雑談をしていた。

竜牙
「……ん？」

雑談をしていた時、竜牙は突然何かに気付く。

鈴
「どうしたのよ？突然話すのを止めて？」

竜牙
「いや、なんか変な気配がするんだよ……」
真耶
「変な気配？」
竜牙
「ああ、なんかこう……気持ち悪い何かが……」
ーークックックックッ……よく気付いたな……ーー
竜牙
「ッ！？誰だ！」
竜牙達は突然聞こえてきた声に警戒する。
？？？
『やっぱり……お前……“転生者”か？……てめぇみたいな奴はいねえ筈だからな……』
鈴
「ちょっと！どこにいるのよ！姿を現しなさいよ！」
？？？
「そんなに急かさなくても……もう出ているんだがな」
そう言うと突然庭に銀髪で左右の目の色が違った俗に言うオッドアイをしていて、なんか最初からイケメンという感じをした青年がいた。だが、竜牙と鈴、真耶は青年から発する異様な気配に警戒していた。

竜牙
「てめぇ……何者だ？つうか、勝手に人ん家に入るんじゃねぇよ。不法進入で警察呼ぶぞ」
？？？
「別にお前に用は無い。用があるのは……そこの２人だ」
真耶
「私たち……？一体何の用ですか……？」
真耶はそう警戒しながら言った。
バロン
「そうだ、お前達２人を今日からこの『バロン・Ｄ・イフリス』の嫁にする！だがらその不良から離れて俺の所に来い！」
竜牙＆ａｍｐ；鈴＆ａｍｐ；真耶
「「「……はぁ？」」」
突然そう言ってきた男、バロンの言葉に３人は呆れた。
竜牙
「なぁ母さん、鈴。俺、アイツの言っている意味が分かんねえんだが……」
鈴
「奇遇ね。私もよ。なんであんたみたいな奴の嫁にならないといけないのよ？私、竜牙の許嫁なんだけど」

真耶
「私も……なんで自分の息子から離れないといけないのか分かりませんよ」

竜牙達はそう言って、バロンを見ながらコイツ馬鹿じゃね？っといった顔で見ていた。

バロン
「何！？お前、真耶の息子だと！？それに鈴が許嫁！？お前、やっぱり転生者だな！」

竜牙
「だから、さっきから転生者転生者って言っている意味分かんねえんだが」

バロン
「チィ！こうなったら……チェンジ！ゲッターダークネス！スイッチ・オン！」

そうバロンがいうとバロンの首にかけていたペンダントが光出し、黒い霧のようなのがバロンを包み、霧が晴れるとそこにいたのは、メインカラーが赤の全身装甲の機体、ゲッター1がいた。

竜牙
「なっ！？ゲッター1だと！？なんでてめぇがそれを……！？クソっ！！チェェェェンジ！ゲッタァァァァワンッ！！」

鈴
「竜牙！私も、来なさい！甲龍！」

真耶
「私も戦います！ゲッターリヴァイブ！」
竜牙はそう言って自身の愛機の新ゲッターを展開する。鈴も竜牙に加戦するため甲龍を、真耶も同様に真耶の専用機『ゲッターリヴァイブ』を展開する。

バロン
「喰らえ！ゲッタートマホーク！」

竜牙
「こっちも、ダブルゲッタァァァァトマホーク！」

バロンは肩からトマホークを出し、竜牙も両肩からトマホークを取り出し、連結して、斬り合う。

ガキィンッ！！

バロン
「うぉ！？」

竜牙
「オラオラッ！！どうした！使い方がなってねえぜ！鈴！」

鈴
「分かっているわよ！喰らえ！衝撃砲！」
竜牙はそう言ってバロンを追い上げてると、鈴がバロンの後ろから衝撃砲を喰らわせる。

バロン
「グワァッ！？」

真耶
「まだです！ゲッター！パイル・ショット！」

さらに追撃に真耶が右腕に装備されているバンカー式レールガンをバロンの土手っ腹に喰らわせ、地面に叩きつける。

バロン
「グフゥ……ッ！！く、クソ……バ…バカな……この俺が……」

竜牙
「さて、なんでてめぇがそれを持っているかきっちりと説明してー！？」

竜牙がそう言ってバロンに近づこうとした瞬間、突然バロンの周りがひび割れ始める。

バロン
「■■■■■ーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！」

とても人間の声ではない叫びを上げながら、バロンは次の瞬間、地面に開いた穴から落ちていき、竜牙達もその広がった穴に巻き込まれる。

竜牙
「うわぁ！？」

鈴

「キャア！」

真耶
「キャ！」

そして、竜牙達は落ちた後、穴は閉じてしまった……。

番外編1『謎の青年、現れて別世界行き！』（後書き）

次回、ゲッターを継ぎし者との出会い。お楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8373x/

真(チェンジ！！)ＩＳ《インフィニット・ストラトス》ゲッターロボ！

2011年11月27日02時57分発行